

ジェネラル・ソーシャルワークにおける生活への視座に関する研究

西梅 幸治¹

(2016年9月23日受付, 2016年12月14日受理)

Study on Perspective to Life in General Social Work

(Received : September 23, 2016, Accepted : December 14, 2016)

Koji NISHIUME¹

要 旨

近年、ソーシャルワークにおいて、ジェネラル・ソーシャルワークやジェネラリスト・ソーシャルワークが重視されるようになってきている。特にわが国においては、その独自の方法論の確立を目指したジェネラル・ソーシャルワークが体系化されてきている。本稿では、そのジェネラル・ソーシャルワークの概要と枠組みを整理しながら、利用者の営む固有な生活を捉える視座についての検討を行った。そこでは、エコシステム視座が中核的な視座として位置づけられており、その具体化を中範囲概念によって図ることの重要性が明らかとなった。

キーワード：ジェネラル・ソーシャルワーク, 生活, エコシステム視座, 中範囲概念

Abstract

Generalist and general social work have recently been emphasized in social work. In Japan, in particular, efforts have been made to systematize general social work practice through the establishment of its own independent methodology. The present study focuses on an overview and the conceptual framework of general social work. At the same time, the perspective of understanding a client's peculiar life is examined. The results of the analysis from the perspective revealed that ecosystems perspective is a core concept in general social work. And it has become clear that it is significant to clarify the perspective by using a middle-range concept of ecosystems.

Key Words : general social work, life, ecosystems perspective, middle-range concept

1 高知県立大学社会福祉学部社会福祉学科・准教授・博士（福祉社会学）
Department of Social Welfare, Faculty of Social Welfare, University of Kochi, Associate Professor (Ph. D.)

I. はじめに

わが国では、「誰もが支え合う地域の構築に向けた福祉サービスの実現—新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン—」でも指摘されるように、人々の生活をめぐるニーズが複雑化の一途を辿っている。ソーシャルワーク・サービスの対象となる利用者也複合的課題を抱え、各分野や領域の専門性のみで問題を解決することが困難となっていることから、新しい地域包括支援体制の確立を目標に、分野を問わない包括的な相談支援や地域の実情に見合った総合的なサービス提供体制の確立が目指されており、この現状に呼応するための方法論が求められている。すなわちソーシャルワークが展開される各領域を超え、共通基盤を整理しながら新しいソーシャルワーク方法論とその展開過程の精緻化を目指すことがますます重要となってきたといえよう。

そのため今日では、欧米で確立されてきたジェネラリスト・ソーシャルワークという用語が多用され、重視されるようになってきているが、入門コースや基礎的部分との理解から、窓口対応や社会資源の調整に重点化したhow toへと逸脱していく懸念を持たざるを得ない。一方でわが国における社会福祉とソーシャルワークをめぐって、①制度・政策と方法・技術、②理論と実践が乖離しながら発展してきたソーシャルワークの独特な発展経緯がある。その視点や発想を考慮せず、単に方法だけを輸入するのではわが国には浸透しないのではないだろうか。そのため再度、その問題を利用者の生活に立脚しながら、①については実践方法の側面から、そして②については実践へ通じる理論の側面から包括・統合していく視点や発想により、方法論自体を問い直すことが必要となっている。

このような意味でジェネラル・ソーシャルワークは、わが国に紹介されているジェネラリスト・ソーシャルワークと一線を画し、わが国の実態に呼応する独自のソーシャルワークの方法論といえるだろう。この現状に伴い研究動向をみていくと、

ジェネラル・ソーシャルワークと呼称されながら独自に体系化が図られている。そこで本論では、わが国において体系化が目指されているジェネラル・ソーシャルワークに着目し、その概説をしながら特にそこでの生活の捉え方について考察を行いたい。なぜならソーシャルワークにおいて生活の捉え方は、利用者支援に関する専門性の中核であり、利用者の営む生活への理解が不可欠といえるからである。

II. ジェネラル・ソーシャルワーク

1. ジェネラル・ソーシャルワークの概要

ジェネラル・ソーシャルワークの概要は、表1のように整理することができる¹。ジェネラル・ソーシャルワークに関して太田義弘は、20点に渡るキーワードが示す専門性の意義を通じて理解できるとし（太田1998：9）、その視野と発想を8点にまとめ詳解している（太田2002b：3-4）。そしてジェネラル・ソーシャルワークを包括・統合的な支援科学として提起するために不可欠な6点の特徴を示している（太田2007：90）。

また秋山薊二によると、ジェネラル・ソーシャルワークの7点の目標が設定されている（秋山1999：73-76）。そのジェネラル・ソーシャルワークにおいては、中村佐織が利用者の生活を人と環境が織りなすエコシステム過程と捉えることに特徴があると指摘している（1998：17）。このような生活の視点を重視し、対象領域や問題の性質に対応して支援局面を弾力的に展開することがより有効であるという認識のもとに支援過程が整備されている（中村1999：86-113）。そしてそこでの機能と役割は、齊藤順子と谷口泰史により10点に整理されている（齊藤1999：155-164, 182-192；谷口1999：164-182, 192-198）。

このようにみていくと、ジェネラル・ソーシャルワークは、利用者の営む生活に焦点をあて、その体験において生じる課題解決への支援を、個別な課題解決から制度・政策的解決までを視野に入れた過程を通じて展開する。利用者の生活は、ソー

シャルワークに固有な人間と環境の交互作用という専門的な枠組みを用いてその実存に迫ることで理解できる。そこでは、課題解決に積極的に参加し協働する利用者と、支援としての関係を築いていく。そしてその関係を基礎に推進される支援過程は、エンゲージメント、アセスメント、計画策定、インターベンション、評価・終結の各局面内容とその循環により特徴づけられ、各種方法レパートリーが駆使される。それを通じて、利用者の自己実現と社会正義を目標に、エンパワメントと各種社会資源の改善や制度・政策的変革を促進していくのである。またその実践は、実践構成要素としての価値・知識・方策・方法とその背景にある学際的諸科学に支えられた包括・統合的な支援科学に裏打ちされているのである。

2. ジェネラル・ソーシャルワークの概念枠組み

上記をふまえ、ジェネラル・ソーシャルワーク

の特性を引き出す前提となる概念枠組みについては、その概略を以下のような6点に整理することができる。

1) 人間と環境への視座と発想

人間と環境をとおして生活を捉えることは、ソーシャルワークがRichmond, M. E.以来目指してきた焦点である。それ以降は、病理モデルに依拠し、人間の病理や欠陥・欠損などに焦点をあて、その治療に重点をおいてきた。しかしエコシステム視座による方法論統合の後、その関心は、生活を認識していくことに移り、この視座に基づく人間と環境との交互作用を含めた生活の統合的全体性に焦点をおくこととなった。

2) 利用者とソーシャルワーカーの参加と協働

従来の病理モデルは、ソーシャルワーカーがクライアントを治療するという援助展開であった。しかし、コンピテンスやストレングス、エンパワメント概念に依拠することにより、課題解決を目

表1 ジェネラル・ソーシャルワークの概要

視野と発想	キーワード	過程の各局面と特徴	機能と役割
①生活コスモスへの視野 [固有世界・統合的全体性] ②利用者中心の発想 [利用者本位・社会的自律性] ③人と環境への視座 [状況理解・エコシステム] ④実践方法のシステム化 [構造化・実践構造] ⑤科学的・専門的知見の学際化 [科学化・支援科学] ⑥課題への方法過程 [課題認識・過程展開] ⑦レパートリーの推進方法 [方法統合化・支援特性] ⑧フィードバックと循環 [方策統合化・実践特性]	①生活概念 ②統合的全体性 ③利用者中心 ④社会的自律性 ⑤システム思考 ⑥生態学的視座 ⑦実践構成要素 ⑧実践システム ⑨専門性 ⑩多面的アプローチ ⑪問題認識 ⑫問題解決過程 ⑬方法レパートリー ⑭統合的实践 ⑮実践方法論 ⑯専門職業 ⑰フィードバック ⑱政策策定 ⑲支援科学 ⑳自己実現	①エンゲージメント ・問題を理解すること ・感情を同一視すること ・ゴールを認識すること ・他施設・機関への委託の考慮 ②アセスメント ・エコシステム視座から情報収集と問題認識 ・情報認識による専門的判断 ・計画・介入への方向づけ ・チーム・アセスメント ・エンパワメント視点の重視 ・ミクロからマクロの循環の重要性 ③計画策定 ・達成目標の明確化 ・活用すべき焦点システム（関心の視点） ・戦略、役割、課題の同一視、 ・時間や費用面の考慮 ・人間の成長する潜在的かつ適正な能力への着目 ④インターベンション ・ターゲットとゴールに向かう具体的な方法 ・積極的実施 ・直接的相互作用をとおして課題解決を行う直接的インターベンション ・間接的である環境を調整する側面である間接的インターベンション ・エンパワメントに向けた役割と戦略 ⑤評価と終結 ・目標達成の明確化と活用方法の分析 ・援助過程の効率・効果の評価（過程評価・プログラム評価） ・モニタリング機能 ・終了の予告 ・援助過程の振り返りと評価 ・感情の分かち合い、パワーについての話し合い	①相談援助者 [Conferee] ②支援者 [Enabler] ③弁護者 [Advocator] ④管理者 [Manager] ⑤保護者 [Guardian] ⑥仲介者 [Broker] ⑦調停者 [Mediator] ⑧ネットワーク [Networker] ⑨ケースマネジャー [Case Manager] ⑩エデュケーター [Educator]
包括・統合的な特徴	目標		
①制度・政策の実践的統合化 ②理論と実践との統合化 ③科学的方法の統合化 ④生活コスモスへのチャレンジ ⑤支援概念の展開 ⑥支援諸科学の学際的協働	①利用者の自立・自助 ②利用者の主体的視点の尊重 ③利用者の対処能力の向上 ④社会福祉サービス・各種社会資源の改善と向上 ⑤利用者と資源・サービスとの連結による活力ある相互作用の確立 ⑥制度・政策策定への参画 ⑦実践方法と実践行動システムの検討による専門性の向上		

指す利用者の自助をソーシャルワーカーが支援²するという関係を重視するようになった。このことは、援助から支援への移行であり、利用者自身の力を活かした課題解決への支援という意味での参加と協働が目指されている。

3) 実践構成要素としての価値・知識・方策・方法
かつてのソーシャルワークは、技術・技法を追究する動向もあった。しかし Bartlett, H. M. は、「価値・知識・介入レパートリー」の共通基盤を示し (Bartlett1970)、わが国の現状に即して太田 (1999a: 19-23) が「価値・知識・方策・方法」を実践構成要素として整理した。これらは、実践システムとして機能しており、どれを欠いても実践活動の意義が霧散し、その機能を期待することができない。よってこれらの構成要素を欠くことのない実践を目指すことが包括・統合化の背景にある。

4) ミクロからマクロまでの循環的实践

方法論統合化以前のケースワーク、グループワークなど独自の展開をしてきた実践活動では、利用者のトータルな問題には対応できないことが課題となった。そこでソーシャルワークの活動である実践・運営・調査・政策などを包括・統合化し (太田 1998: 7)、ミクロな実践課題を個別に解決するだけでなく、制度・施策改善への提言や方法にまで拡大するマクロな実践活動への視点を含め、すべてのレベルのシステムを利用者とした支援展開を目指すことが重視されている。

5) 支援科学による理論に基づく実践の推進

理論と実践の関係については、その乖離の問題が指摘されている (例えば太田 2002b: 7)。わが国においては、ソーシャルワーカーという名称の実践家が存在しても、その拠って立つ理論があいまいなまま、経験と勘のみで積み上げられた実践が展開されてきた経緯がある。上記と関連しながら、単なる制度・政策に基づくサービスの提供のみに終始したり、生活の主体者である利用者の自己決定は置き去りにされたまま、一方的な処遇や援助が行われてきた。そのことへの反省から、わ

が国においては再度、太田 (2009a) の指摘するような実践の科学化を志向しながら、理論に基づく実践が可能なソーシャルワーク方法論を提案する必要がある。それが太田 (2007) の指摘するような理論を実践に活かすための中範囲概念であるエコシステム構想を備えた支援科学としてのジェネラル・ソーシャルワークである。

6) 方法・技術の側面からの制度・政策の包含

社会福祉とソーシャルワークの関係については、歴史的経過をもとに太田 (2000) が①不分・併合的類型、②分立・相補的類型、③包括・統合的類型として段階的に整理しながら、③包括・統合的類型を今後のあるべき姿として示している。そこでは、利用者の生活を起点にしたソーシャルワークという実践方法が、制度・政策を整備・計画・立案・運営していかなければならないことが強調されている。すなわち利用者の生活に立脚したソーシャルワークという実践方法の側面から制度・政策を取り込んでいく発展形態としての③包括・統合的類型が今日求められるわが国のソーシャルワークであるといえよう。

このようにジェネラル・ソーシャルワークは、利用者と共に生活支援過程を展開する包括・統合的で創造的な特性や方法を具備した概念である。それは、人間と環境への視野と発想、利用者と支援者の協働、価値・知識・方策・方法からなる実践システム、ミクロからマクロまでの循環的实践、支援科学という学際的理論に基づく実践、方法・技術から制度・政策の包摂というアイデアを内包した固有な方法論である。その具体化された方法と過程を展開する実践活動概念こそが、今日的な課題に対応し、高度専門職業に求められるジェネラル・ソーシャルワークなのである。

3. ジェネラル・ソーシャルワークにおける生活概念の重要性

ソーシャルワークは、1970年に Bartlett, H. M. によってその共通基盤が確立されてきた。Bartlett は、本質的な要素としての価値・知識・

介入レパートリーをソーシャルワークの基盤におき、価値と知識を介入レパートリーよりも先立つ重要な要素として整理した（Bartlett1970：81）。わが国では、その現状に即して太田が価値・知識・方策・方法を実践構成要素としてソーシャルワークの実践システムが形成されることを指摘している。なかでも価値の重要性は、その行動規範として具体化された倫理とともに重視されている。そこでの価値は、「実践への理念や原理を形成し、実践倫理へと昇華され方法や技術の根底を支える動機や実践行動の課題」として存在している（太田 2005：2）。そしてこの実践活動の根源である価値は、ソーシャルワークの実践特性そのものを反映した実践原理として、形を変えながら体系的に整理されている。

太田（2008：119）によると、ソーシャルワーク実践での認識や行為の基本になる理論や枠組みとして実践原理が整理されている。それは、利用者原理、支援者原理、関係原理の3類型と基本、方法、態度という3特性からなる枠組みである。利用者原理の基本特性として生活概念が指摘されており、そこでは固有性、生活コスモス、エコシステム状況が原則として挙げられている。このような原理について、例えば Lee, J. A. B. も、アプローチの構造を決定し、ソーシャルワーカーに開かれた行動の選択範囲を定める制約を含んでいることを指摘している（Lee2001：59）。

これらの指摘から理解できるように、ソーシャルワークにおいて実践理論や方法が多様になってきているが、利用者との実践に適用するためには、その根源となる価値やそれを反映した原理に裏打ちされることが不可欠な課題である。なぜなら、利用者を目の前にソーシャルワークとは何か、そして理論に基づく方法展開によるその実践がソーシャルワークであるかについて、ソーシャルワーカーという一専門職として利用者に対して真摯に応えなければならないからである。加えてその原理に示される生活・支援・過程を適切に推進することが求められるからである。その意味で

本稿では、改めてジェネラル・ソーシャルワークとしての生活を捉えることの意味とその理論的枠組みを整理してみたい。

Ⅲ. 利用者生活の把握と理解への視座

1. ソーシャルワークにおける生活概念

ソーシャルワークは、利用者の生活に立脚した専門的な支援、すなわち利用者の生活に関して過程をとって支援する方法である。生活に焦点をおくという試みは、Richmond の時代に遡ることができる。彼女は、個人と社会における恒久的な福祉を念頭に、ソーシャル・サービスの有効性について、生活全体という観点をふまえた基準を適用し、ソーシャル・ケースワークを一般化しようとした（Richmond1922：90）。その後1960年代になると、生活に焦点化することが再度見直されるようになった。例えば、自我支持的な実践を推進するために、1963年に生活モデルを提案した Bandler, B. や、その研究に影響を受けた Germain, C. B. らが、実在する普通の生活の過程を利用した実践の重要性を唱えている（Germainら 1980）。一方で1970年には、Meyer, C. H. が進展する都市での生活危機に対応するソーシャルワークについて、すべての市民が潜在的にソーシャルワーク・サービスの利用者であることを指摘しながら、人生の岐路で関わることの必要性について強調している（Meyer1970：158）。

このようにソーシャルワークでは、すべての人々にとって日常的な営みとしての生活に焦点をおく。しかし生活は、日常的であるがゆえに、端的に定義することが難しい。生活と聞くと例えば、衣食住という言葉が浮かぶが、そのみではソーシャルワークが扱う生活の意味にはならない。近年では、個人や家族の生活行為の体系を明らかにする生活構造論などに代表される研究がなされてきた。その一方で生活者の満足感、安定感、幸福感などから構成される生活の質（Quality of Life）が問われ、その評価指標が検討されるようになってきた（例えば松本 1988）。この点につ

いて例えば潜在能力アプローチを提唱した Sen, A. は、このアプローチの観点から生活の質について論究している。そこでは、生活を「していることとある状態であること」の多様な組み合わせとし、その質が価値ある機能を達成する潜在能力という観点から評価されると指摘している (Sen1993: 31)。

ソーシャルワークにおいては、生活を捉えるという意味でいずれも重要であるが、その真意はまず生活構造論のように、生活に関して理論的整合性を確立することではない。社会福祉の立場からみると、生活構造論は生活の一般的な構成を認識するもので、かつ構造を枠組みとして問題を見出し、援助する視点を備えていないことが指摘されている (高田 1993:59)。すなわちソーシャルワークでは、単に生活の仕組みを解明する生活構造ではなく、社会福祉サービスを提供するという支援を目標として生活の仕組みを捉える必要がある。

加えて生活の質については、研究面での多くは生活への一般的な評価意識を問うことになる。しかしソーシャルワークで捉える利用者の生活は、その個々の質向上とそれに対する利用者自身の評価意識の高さが目標となることはもちろん、その前提として現状での利用者個々の生活実態とそこでのニーズを認識することが必要となる。さらにその仕組みは、利用者の主観的・主体的側面からの実体として理解していくことが求められ、普遍的な生活の質を測るのみでは不十分である。すなわちソーシャルワークでは、利用者の営んでいる生活の固有性や個別性を尊重した実感としての生活を重視し、それを捉えることが不可欠であるといえよう。

2. 固有な営みとしての生活コスモス

利用者が固有に営んでいる実感としての生活を捉えることは、ソーシャルワークの専門的な視野である。利用者側面から捉えた生活を生活コスモスと称し、支援において不可欠な概念となっている。コスモス (cosmos) とは源流を辿ると、ギリ

シア語で秩序を与えられ整えられた世界を意味し、秩序や調和と同意にも用いられる。例えば社会学の領域では、Berger, P. L. が宗教社会学の観点から、ノモス・カオス・コスモスの関係を整理し、人間社会が意味的な世界であり、人々が現実を意味づけながら絶えず構築していることを指摘している (Berger = 1967)。また同時に、日常的な世界であるノモスが規範喪失の恐怖をもたらすカオスに対抗するために、現実への秩序を与えるコスモスの重要性と、そのコスモス化について「人間的な意味深い世界を世界そのものに同一化すること」であると述べている (Berger = 1967: 41)。

一方、社会福祉学の領域では、利用者の生活コスモスに迫ることがソーシャルワーク支援展開の鍵となる。生活コスモスについては、太田が「生活とは、具体的な出来事の連続からなる現実であるが、他者からは部分的にしかとらえることのできない固有な世界であり、独自の広がりや内容さらに秩序をもって構成され、この固有な領域・関係・内容からなる世界」として定義している (太田ら 2006: 5)。また別の側面から、「利用者中心の人間と環境からなる固有な空間と時間や内容が構成する生活世界」をコスモスとし、ソーシャルワークの概念特性の一つに挙げている (太田 2009b: 4)。このようにみていくと生活コスモスは、環境との意味連関のなかで、利用者固有の立場に立脚することで捉えられる空間と時間をとおして、利用者独自に創造し得る秩序と調和の図られた生活世界であると理解できる。

一方、この生活コスモスは、その人自身と切り離すことのできない実存的な営みから成立している。そのためその立ち位置に協調してはじめて了解できる世界である。例えば実存主義者である Sartre, J. P. によると、実存主義とは、人間生活を万能にする教えであり、あらゆる真理や行動は、環境と人間的主体性を内に含み、主体性から出発するという「実存は本質に先立つ」と宣言する考え方である (Sartre = 1996)。その考え方は、一

般的に物や動物には本質が備わっており、そこから生じる価値が現実の存在（実存）より先立っている。しかし人間は、本質よりも実存が先立ち、人間は自らつくるところのもの以外の何ものでもないことを示唆している。

すなわち人間は、一人ひとり固有な存在であり、その本質よりも実存が先立つことが強調されている。そのことは、ソーシャルワーカーに再度、共感的理解を通じた利用者のあるがままを受け入れる態度を明確化し、その尊厳を重視することを強く要求する。そして利用者の生活を営むうえでの主体性を尊重し、その選択と自己決定によって未来を切り開く存在であることに敬意を払うことに示唆を与える。このような意味でコスモスとしての生活は、利用者独自の空間と時間からなる環境との関係性を通じて主体的に営まれている世界なのである。

3. 生活コスモスへの視座

ソーシャルワークが焦点をあてる生活コスモスは、上述のとおり環境との関わりのなかで利用者が実存的に営む時間軸を通じた連続性のある暮らしである。そのような生活コスモスにいくらかでも近似した形で迫り、利用者と共に把握していくためには理論的枠組みである思考方法が必要となる。この理論的枠組みが perspective「視座」と呼ばれるものであり、ソーシャルワークにおいては今日、エコシステム視座（ecosystems perspective）がその代表である。特にジェネラリスト・ソーシャルワークやジェネラル・ソーシャルワークにおいては、中核的な概念である。

それは、利用者個々に固有なものであり、他者からは接近困難な生活コスモスを、いくらかでも理解可能にするためにソーシャルワークのなかで適用されている。ソーシャルワークにおけるエコシステム視座は、包括的な視座が現実の生活としての人間と環境の複雑さを説明するために必要となることを指摘した Meyer, C. H. によって定式化された。それは、Meyer (1988: 277) が生態

学と一般システム理論という2つの理論的潮流を起源に持つと述べるように、生態学と一般システム理論を統合・止揚した人間と環境の実体を捉えていくための理論的・概念的枠組みである。生態学と一般システム理論の両概念については1960年代後半以降、ソーシャルワークで有効に活用するために包括・統合化が図られた。

このようなエコシステム視座を構成するアイデアの一つである生態学は、1866年に Haeckel, E. によって提案され、20世紀に入って人間や社会を対象とした研究が進展した。そして一般システム理論については、1920年代より研究が進められてきている。そしてこれらの成果をふまえ、エコシステム視座は、ソーシャルワークにおいても探究されるようになってきた。このエコシステム視座の導入は、従来の精神分析論に代表される理論に依拠した病理モデルとは異なる見方を提供し、ソーシャルワークにおけるパラダイムの転換として大きな影響を与えたのである。

この視座は Meyer (1983) によると、認識のための道具であり、ケース現象について考える方法として、かつ多様な実践モデルのための概念枠組みとして広く活用することが意図されている。特に彼女は、人々と環境の関係性について考えアセスメントする方法を提供し、人々の生活での複雑な現実における相互関連性に注意を払うための適用を探索している。別の側面からいえば、Germain らの生活モデルのように、生態学や一般システム理論の下位概念をメタファーとして生活理解に活用し、モデルを構築することを目的としていない。そしてソーシャルワーカーが何をすべきかや、問題を定義したり特定のインターベンションを規定することを意図しない。その意味でこの視座に基づけば、生活モデルも選択肢の一つとなるのである。1970年代には、このような実践をめぐる包括的な視点を獲得する努力がなされ、ソーシャルワーカーが従事する現象を把握したうえで、必要となるインターベンション課題を決定し、ケースの必要性に見合う適切な方法を選択す

るために、その中心関心が方法や技術から視座へ移行してきたのである。

Ⅳ. エコシステム視座からみる生活

1. エコシステム視座の適用

ジェネラリストの視座について研究を行った McMahon, M. O. は、環境のなかにおける人間に関する生態学的システム視座 (ecological-systems perspective) がジェネラリスト実践において中核的な要素であると指摘しながら、その視座について、図 1³ のように表現している (McMahon 1996: 26)。そこではシステム理論と生態学がシステムとしての人間とその環境、そしてそれらの適合と相互作用を捉えるために統合化されているとし、人間を様々な部分からなるシステムとして、家族や友人、コミュニティなどの育んでいくものや、制度や組織、社会におけるプログラムなどの支えとなるものからなる環境についても同様にシステムとして理解することを表現しているのである。

またソーシャルワーク実践の理論的基礎に、エコシステム視座を取り上げている Allen-Meares, P. らによると、図 2⁴ のようにその視座に基づく 3 つの主なアセスメントの側面を示している (Allen-Meares ら 1987)。それは、重要なデータ変数、主要なエコシステム、そして関連するデータ源の 3 つである。そこでは、①包括的なエコシステム・アセスメントには、多様なエコシステムについての収集されたデータが必要となること、②アセスメントは、3 つのデータ源 (人間、重要な他者、環境のなかにある利用者の直接的な観察) からの情報を含むこと、③アセスメントは、人間と状況を描写する重要なデータ変数のすべてに関する情報を収集すること、④包括的なアセスメントは可能な限り多くの構成要素を包含すること、⑤アセスメントデータは、利用者の状況に関する全体像に統合されること、⑥エコシステム・アセスメントは、インターベンション戦略における多様なレパートリーに関連すること、という 6

つの実践原理を挙げている。そしてすべての社会的現実を網羅することは難しいとしながらも、包括的なアプローチを特徴とするエコシステム視座の有用性を指摘している。

2. エコシステム視座からの生活理解

一方、このエコシステム視座について、わが国で一早く研究に取り組んだ太田は、これら生態学と一般システム理論を援用しながら、それぞれの特性を活かして一方では、生活という実体のリア

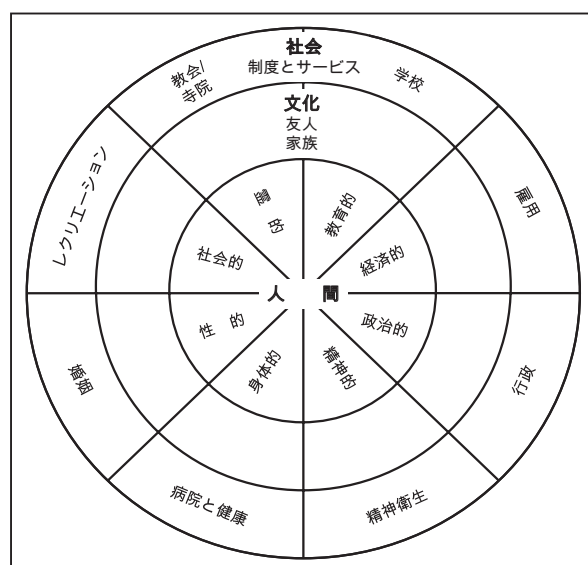


図 1 環境のなかの人間への生態学的システム視座

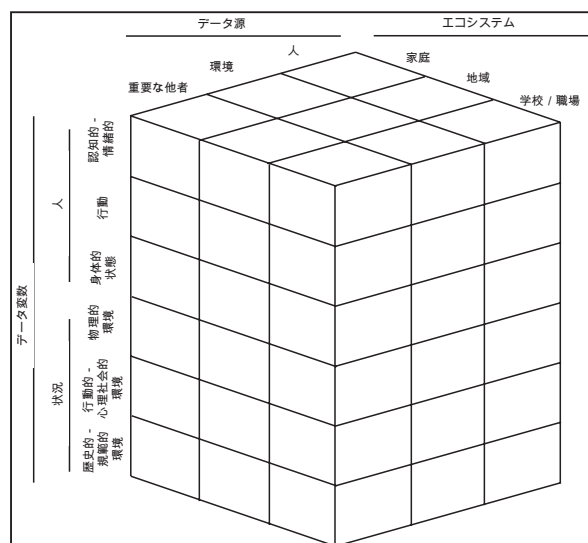


図 2 エコシステム・アセスメントの枠組み

るな実像理解を、人間と環境を含め動態として把握し、生活システムの時間的経過や変化を客観的に整理するために生態学的発想を用いる。また他方で、利用者の生活をととした人間や環境のシステムと動きを理解する思考概念として、その動態を理解可能な要素に分解し、系統的な思考や記述方法を用いることによって、実態把握を説得力のあるものにしようとするシステム思考を活用すると述べている⁵。そのうえでそれらを統合・止揚し、両者の共通特性として、①人間と環境、②相互依存性、③関係状況、④均衡維持、⑤力動性、⑥変容、⑦適応、⑧目的志向性、⑨安全性、⑩統合的全体性を挙げている（太田 1992：101）。

この特性をふまえエコシステム視座として援用することは、人間と環境、その交互作用からなる利用者の生活を、過去・現在・未来の時間軸をふまえて理解し、ソーシャルワーク支援の枠組みを提供することになる。すなわちエコシステム視座は、時間の流れのなかにある人間と環境の交互作用をシステム思考でその構造や機能から説明し、かつ生態学的な発想からその変容状況を把握することにより、生活の実体を捉えることを可能にしているのである。

一方でジェネラル・ソーシャルワークは、前述のとおり、学際的な諸科学の協働によって成立する支援科学を背景に、この視座を基盤として利用者固有のミクロな課題解決からマクロな制度・政策の整備とサービス点検までを包括・統合化する体系的な理論である。しかしそれがいかに精度の高い理論であっても、利用者の現実や抱える生活課題の解決から遊離しているのでは意味がない。理論と実践を結び、ジェネラル・ソーシャルワークを利用者の自己実現への支援に具体的に活用できる実践行動概念が必要となる。そのアイデアこそが、実践の展開方法とコンピュータ支援ツール（以下、支援ツール）を備えたエコシステム構想である。

太田（2003）によるとエコシステム構想は、ジェネラル・ソーシャルワークの中心理論としてのエ

コシステム視座を、実践場面で応用可能な実践理論として具体化する試みである。これまでエコシステム視座は、利用者の生活を認識する思考方法や発想の域を超えず、抽象性の高いメタ理論に留まっていた。エコシステム構想では、その思考枠組みを誰の目にも明らかになるよう外在化し、かつ利用者とソーシャルワーカーで築く支援過程の展開場面で応用可能な方法としての具現化を目指している。

それには、エコシステム視座という理論的な思考の枠組みに、生活コスモス理解に向けた利用者の生活の実像に迫るソーシャルワーカーのチャレンジと、利用者自身の洞察との積み重ねから構築された実践での知を注入し、理論的枠組みに収まる実践内容を検討することが欠かせない。このようにエコシステム構想は、理論的な枠組みと実践内容とを相補的に織り交ぜながら、理論と実践との架け橋となる中範囲概念として提案されるものである。そしてこの構想を科学的な方法によって展開するために、コンピュータの情報を扱う機能を駆使した支援ツールが開発されているところである。これらを通じてエコシステム構想は、利用者を目の前にする現実場面で適用可能な実践行動概念として機能するわけである。

3. 生活理解に向けた中範囲概念の重要性

エコシステム構想は、コンピュータを用いて支援を科学化する試みであり、情報処理とシミュレーション、ビジュアル化によって利用者のおかれている生活の状況理解を促進する。エコシステム構想を現実の利用者への生活支援に適用するために新たに開発されたこの支援ツールは、Ecoscanner（通称「エコスキャナー」）という固有なコンピュータ・ソフトウェアとして、現在、その成果が公表されている（例えば太田ほか 2005；太田 2009b）。エコシステム構想では、支援ツールを用いて「生活というエコシステム状況を詳細な情報因子に分解・統合することで、そのために生活状況をシステム分析・統合する枠組み

や状況を構成する因子などの詳細な生活システム情報を収集しなければならない。そしてそれらの情報因子をコンピュータを用いてシミュレーションし、「支援に必要な情報へと処理・加工」することで、エコシステム視座を実践に具体化することを試みる（太田 2002a：7）。

このエコシステム情報を収集する枠組みは、一方で、ソーシャルワーク実践の構成要素である価値・知識・方策・方法の4要素を構造化して基礎におくことで、ソーシャルワーク支援の視点から生活を把握することを可能にしている。また他方では、「生活という広がり进行分类として①包括・統合的な実体から、②領域として人間と環境とに2分割し、それを③分野として当事者・基盤・周辺・支援とに4分割、それらを④構成として特性・問題・身辺・家族・近辺・資源・機関・ネットワークとに8分割し、さらにそれらを生活の⑤内容として32分割し、ミクロからマクロにわたる生活内容を指標として配列」している（太田 2003：7）。そしてこれらを組み合わせた128因子により、支援に不可欠な生活状況を網羅し、その因子特性を理解するための質問項目を設定している。

この質問への回答結果を通じて、利用者の生活コスモス認識をソーシャルワーカーの専門性から把握し、生活の構造や機能、そして変容過程が、支援局面を通じて描き出される仕組みとなっている。このことは、利用者の暮らしを外在的にビジュアル化し、利用者とソーシャルワーカーの協働による対話をも可能にする。その過程では、広範で系統的な生活状況理解への情報を的確かつ迅速に処理することにより、利用者の自己理解を深めるとともに、ソーシャルワーカーに専門的な判断への根拠を提供するという生活への意味づけを可能にする側面も備えている。

中範囲概念としてのエコシステム構想は、社会学者の Merton, R. M. による中範囲理論から示唆を得ている（太田 1992：243）。彼は、非常に抽象的で日常的な事実とかけ離れがちな誇大理論の

研究や、具体的ではあるが調査を至上として理論的一般化を意図しない経験主義的な研究とは異なり、一般理論のみ経験的調査のみの追究ではない立場として、その乖離を埋める中範囲の理論構築こそが社会学には必要であることを指摘した（Merton = 1961）。特にこの構想を展開していくためには、人間と環境の交互作用を捉えるエコシステム視座を具体化することで、現実の利用者の生活を把握するための精緻化が求められる。しかしながら既述の太田の32項目からなる構成子についても、McMahon や Allen-Meares らの図をみても分かるように、エコシステム視座を援用しながらも、どのような部分に重点をおき、構成するかは相違がみられる。

そのためまずは、エコシステム視座の人間と環境、そしてその交互作用という理論的な側面を基礎にそれらの類似点や相違点を整理しながら、一般的な生活構成の具体化、もしくは対象や分野、アプローチ、局面などを特定していくことにより、場面や過程に応じた生活の構造や機能、そして変容過程が、支援局面を通じて描き出される仕組みを、理論だけでも実践だけでもないその乖離を埋めるための中範囲で検証しながら構築することが不可欠となるであろう。それによって、利用者の現実に可能な限り迫りながら、具体的な実践場面で応用することができるのである。

とりわけ現在の施策的動向である新しい地域包括支援体制の下では、多世代の複合的課題に対応可能な生活構成を検討する必要がある。そこでは、エコシステム視座を理論としながら、その中範囲で生活を捉えていくために、①質的・量的調査を通じた現実的・実践的側面からの構成子や質問項目などの構築とエビデンスの確保、②①に基づく支援ツールのハード面とソフト面の充実に向けた実証的な検証などが課題として考えられる。これらの課題を視野に、中範囲概念としての進展を目指すことが求められる。支援ツールは、あくまでも道具に過ぎないが、適切に活用すれば高度専門職業としてのソーシャルワークの支援効果を

高め、最終的には利用者の生活の質向上に貢献することができると考えられる。

V. おわりに

ジェネラル・ソーシャルワークは、利用者の生活を人間と環境、その相互関係から統合的全体性としてトータルに捉える視野と、その生活を利用者自身が営む上での自律的な行動に寄り添い、利用者自身の自己実現及び、環境と共生できる社会的自律性への支援を展開することにある。またその暮らしは、エコシステム視座という理論的枠組みを用いて、一方で生態学的な発想から、生命・生活・人生を形づくる時間と空間における人間と環境の交互作用からなる実体を、構造・機能・変容という側面からシステム思考で捉えることになる。

ジェネラル・ソーシャルワークは、このアイデアを具体化して生活実体をビジュアル化できる固有な支援ツールを備えることで、それを介して利用者の参加と協働のもとに生活をめぐる問題認識と解決過程を、ミクロな支援からメゾの環境調整や整備、さらにマクロの施策の改善や策定までを見据えることを可能にするとともに、そのフィードバック過程から包括・統合的実践を可能にする実践方法論というアイデアで構成されている。

この支援ツール開発の際には、シート・構成子、質問回答項目、活用方法、情報の変容・運用という4つの側面（構造・機能・意味・変容）において支援ツールの特性を意識することが重要となるだろう（西梅 2009）。例えば構造特性として、生活における人間と環境の側面からどのように情報収集の枠組みを設定するか、機能特性としてどのように利用者の社会生活機能を捉え情報分析を実施するか、意味特性として分析された情報を認識する主体は誰か、そして認識された情報をどのように活用するのか、最後に変容特性として情報を蓄積しながら、利用者の生活の変化や支援展開に応じて情報の変化をどのように捉えるか、などに留意して開発を進めることで、ソーシャルワ

ークの生活支援過程を補完可能な支援ツールとして整備していくことができるだろう。

しかし具体的な利用者の生活をどのように捉えていくかは、生活の構造・機能・意味・変容の側面から実践場面で適用しながら、理論と実践の乖離を埋める中範囲概念として検証していくことでその精度を高めていくしかない。そのためのチャレンジは、これまでも研究成果が公表されているが、今後さらに進展すべき課題といえるだろう。

本研究は、JSPS 科研費 26380751 の助成を受けたものである。

¹ 本表は、視野と発想については太田（2002b：3-4）、包括・統合的な特徴については太田（2007：90）キーワードについては太田（1998：9）、目標については秋山（1999：73-76）、過程の各局面と特徴については中村（1999：86-113）、機能と役割については齊藤（1999：155-164, 182-192）谷口（1999：164-182, 192-198）をもとに作成した。

² 太田（2008：115）によると、「低迷する社会福祉を、その理念や目標のように画餅ではなく実物に生成できるのは、利用者の役割や働きとソーシャルワーカーによる支援活動以外に策はない。そのことに参加し協働できる場面と状況がソーシャルワークであり、その創意と工夫からなる人出を介した地道な活動の積み上げこそが、社会福祉を身近に生きて働く実感としての成果へと導く唯一の方法である」と指摘されている。

³ 図1については、McMahon（1996：26）の図をもとに筆者が邦訳し作成した。

⁴ 図2については、Allen-Meares（1987：519）の図をもとに筆者が邦訳し作成した。

⁵ この見解については、太田（1999a：32）ならびに太田ら（1999b：85）を参照した。

文献：

- 秋山薊二 (1999) 「ジェネラル・ソーシャルワークの基本的立場と方法」太田義弘・秋山薊二編『ジェネラル・ソーシャルワーク—社会福祉援助技術総論—』光生館, 43-82.
- Allen-Meares, P. and Lane, B. (1987) Grounding Social Work Practice in Theory, *Social Casework*, 68 (9), 515-521.
- Bartlett, H. M. (1970) *The Common Base of Social Work Practice*, NASW.
- Berger, P. L. (1967) *The Sacred Canopy : Elements of a Sociological Theory of Religion*, New York. (= 1979, 藺田稔訳『聖なる天蓋—神聖世界の社会学—』新曜社.)
- Germain, C. B. and Gitterman, A. (1980) *The Life Model of Social Work Practice*, Columbia University Press.
- Lee, J. A. B. (2001) *The Empowerment Approach to Social Work Practice*, Columbia University Press.
- 松本洸 (1988) 「第2章 クオリティ・オブ・ライフの指標化と分析法」金子勇・松本洸 (1988) 『クオリティ・オブ・ライフ—現代社会を知る—』福村出版, pp.29-56.
- McMahon, M. O. (1996) *The General Method of Social Work Practice : A Generalist Perspective*, Allyn and Bacon.
- Merton, R. M. (1949) *Social Theory and Social structure : Toward the Codification of Theory and Research*, The Free Press. (= 1961, 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳『社会学理論と社会構造』みすず書房.)
- Meyer, C. H. (1970) *Social Work Practice : A Response to the Urban Crisis*, The Free Press.
- Meyer, C. H. ed. (1983) *Clinical Social Work in the Eco-Systems Perspective*, Columbia University Press.
- Meyer, C. H. (1988) *The Eco-Systems Perspective*, R. A. Dorfman., ed. *Paradigms of Clinical Social Work*, Brunner/Mazel, 275-294.
- 中村佐織 (1998) 「ジェネラル・ソーシャルワークにおける展開過程の意義」『ソーシャルワーク研究』24 (1), 相川書房, 17-23.
- 中村佐織 (1999) 「第3章 ジェネラル・ソーシャルワークの展開過程」太田義弘・秋山薊二編『ジェネラル・ソーシャルワーク—社会福祉援助技術総論—』光生館, 83-114.
- 西梅幸治 (2009) 「過程展開へのコンピュータ支援」太田義弘編著『ソーシャルワーク実践と支援科学—理論・方法・支援ツール・生活支援過程』相川書房, 74-87.
- 太田義弘 (1992) 『ソーシャルワーク実践とエコシステム』誠信書房.
- 太田義弘 (1998) 「ジェネラル・ソーシャルワークの意義と課題」『ソーシャルワーク研究』24 (1), 相川書房, 4-10.
- 太田義弘 (1999a) 『ソーシャルワーク実践と支援過程の展開』中央法規.
- 太田義弘・秋山薊二編著 (1999b) 『ジェネラル・ソーシャルワーク—社会福祉援助技術総論—』光生館.
- 太田義弘 (2000) 「ジェネラル・ソーシャルワークへの再論」『龍谷大学社会学部紀要』17, 龍谷大学社会学部学会, 10-22.
- 太田義弘 (2002a) 「ソーシャルワーク実践研究とエコシステム構想の課題」『龍谷大学社会学部紀要』20, 龍谷大学社会学部学会, 1-16.
- 太田義弘 (2002b) 「ソーシャルワーク支援への科学と構想」『龍谷大学社会学部紀要』21, 1-15.
- 太田義弘 (2003) 「ソーシャルワークの臨床的展開とエコシステム構想」『龍谷大学社会学部紀要』22, 龍谷大学社会学部学会, 1-17.
- 太田義弘 (2005) 「ソーシャルワークの価値と倫理」『関西福祉科学大学紀要』8, 関西福祉科学大学, 1-15.
- 太田義弘・中村佐織・石倉宏和編著 (2005) 『ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング—利用者参加へのコンピュータ支援—』中央法

- 規.
- 太田義弘・小榮住まゆ子（2006）「高齢者に対する生活支援過程考察の意義—ケアマネジメントの実態調査を通じて—」『関西福祉科学大学紀要』9, 関西福祉科学大学, 1-18.
- 太田義弘（2007）「ジェネラル・ソーシャルワークとしてのフィードバック展開」『関西福祉科学大学紀要』10, 関西福祉科学大学, 83-96.
- 太田義弘（2008）「社会福祉政策からソーシャルワークへ—建前としての社会福祉と本音のソーシャルワーカー—」『関西福祉科学大学紀要』11, 関西福祉科学大学, 107-120.
- 太田義弘（2009a）「ソーシャルワーク実践と科学化への方法」『関西福祉科学大学紀要』12, 1-20.
- 太田義弘編著（2009b）『ソーシャルワーク実践と支援科学—理論・方法・支援ツール・生活支援過程—』相川書房.
- Richmond, M. E. (1922) *What Is Social Case Work? : An Introductory Description*, Russel Sage Foundation.
- 齊藤順子（1999）「第5章 ソーシャルワーカーの機能と役割 1 相談援助者（Conferee）」太田義弘・秋山薊二編『ジェネラル・ソーシャルワーカー—社会福祉援助技術総論—』光生館, 155-164.
- 齊藤順子（1999）「第5章 ソーシャルワーカーの機能と役割 4 仲介者（Broker），調停者（Mediator）」太田義弘・秋山薊二編『ジェネラル・ソーシャルワーカー—社会福祉援助技術総論—』光生館, 182-192.
- Sartre, J. P. (1946) *L' Existentialisme est un Humanisme*, Nagel. (= 伊吹武彦・海老坂武・石崎晴己訳（1996）『実存主義とは何か』人文書院.）
- Sen, A. (1993) *Capability and Well-Being*, Nussbaum, M. C. & Sen, A., *The Quality of Life*, The United Nations University.
- 高田真治（1993）『社会福祉混成構造論—社会福祉改革の視座と内発的発展—』海声社.
- 谷口泰史（1999）「第5章 ソーシャルワーカーの機能と役割 2 支援，弁護者（Enabler, Advocate）機能」太田義弘・秋山薊二編『ジェネラル・ソーシャルワーカー—社会福祉援助技術総論—』光生館, 164-173.
- 谷口泰史（1999）「第5章 ソーシャルワーカーの機能と役割 3 管理者，保護者（Manager, Guardian）機能」太田義弘・秋山薊二編『ジェネラル・ソーシャルワーカー—社会福祉援助技術総論—』光生館, 173-182.
- 谷口泰史（1999）「第5章 ソーシャルワーカーの機能と役割 5 その他の機能と役割」太田義弘・秋山薊二編『ジェネラル・ソーシャルワーカー—社会福祉援助技術総論—』光生館, 192-198.

